

砂に書く

小牧, 健夫

<https://doi.org/10.15017/2556308>

出版情報 : 文学研究. 40, pp.185-188, 1950-11-10. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



砂に書く

小牧健夫

このやうな古めかしい題をかかけて私が書きとめて行かうとすることは、今私の住む寓居から十町とはなれない浜や、ここから遠くない土地で、海をながめてゐるうちに胸にきざしたこのごろの感想である。もとより沙中偶語でもなければ、海潮音のやうにむねに盛り上つてくる想念のひびきでもない。いはば子供のときよく手当たり次第に何気なく波打際に書いた絵や文学のやうで、潮がよせると跡かたもなく消えてしまふだけのものだ。

八月十四日。海軟風のそよ吹く日。この浜へ出てみないのも幾年になることか。そのくせ鎌倉や鶴沼では、相模の海の潮の光りに眼をよろこばせ、このあたりを遠景としてながめたことはたびたびあつた。

けふは旧盆だといふのに、浜は何といふ寂しさであらう。四五人の子供が潮を浴びてゐるのが見えるだけだ。この海岸は以前海軍用地だつたが、今進駐軍の演習に利

用されて、ときどき浜への道が通れなくなる、そんなことも手つだつて、ここは海水浴場としてすっかり寂びれてしまつた。

降りつづいた雨がきのふから上がつて、けふは眞夏の陽ざしがきびしい。でも大気の湿度は相当に高いらしく、箱根の連山や伊豆半島の山々は白いもやにとざされて見えない。近い浜では砂いきれで陽炎が立ち、その向ふに見える江ノ島の白い桟橋がたえず左右にゆれうごいてゐる。その辺の海はけふは大へんな人出で賑はつてゐることだらう。

このあひだラヂオで聞いたことだが、アメリカの有名な海水浴場では、夜のうちに砂浜をくまなく清掃し、殺菌薬を撒いて完全に消毒するのださうである。どんなに気持がいいだらうかと思ふ。さうすれば砂の上に寝ころんでも汚ないといふ感じはしないし、子供たちがそこであばれまはつて、砂を口に入れても安全である。さすがにアメリカだけのことはあると羨まれる。

鎌倉や片瀬の海岸は毎日海水浴の人々で混雑をきはめてゐる、そこはもう海といふよりはプールである。プールとすればできるだけ設備を完全にするに越したことはない。プールとしては徹底的に完備したものがのぞ

ましい。一塵もとめない美しい白砂、遺憾なく行きとどいたあらゆる施設、そこではほんとうに安心して子供たちを遊ばせることができる。

だが、ここはプールでなくまだ海だ。幸ひに、といふ言葉をつけ加へてもよい。わだつみといふ名でも呼ばれる海原が私の前にある。そして私の坐つてゐるのは蟹と戯れることのできる砂浜である。見れば海藻がそこそこに散らばり。板片やボロが波に打ちあげられてゐるのが目につく。

私はここはまだ海だと言つた。この「まだ」はいつまでも離れたくない「まだ」である——。

八月十七日。晴。おととひと同じやうな空、同じやうな風。

二ノ宮のK君のところへ往く。馬入川の鉄橋をわたるとき河口の方を見ると、河の流が蒼い海に注ぎ入るあたりが汐けむりにぼんやりかすんでゐる。

河口には特殊の表情がある。静かな日は洋々としていかにもなごやかな趣があり、西洋詩人の擬人法を用ひれば、母なる大洋の懷ろに迎へ入れられる子の安堵が見られるけれども、荒れた日は、うち寄せる波と注ぎ入らう

とする流れとの堰き合ひ、拍ち合ひははげしい「全」と「個」との闘ひを示してゐる。

二ノ宮から国府津にかけての海岸は、伊豆半島がずつと近くなつてゐるだけでも、茅ヶ崎とはちがつた風情がある。ここから西へ行つて小田原あたりから熱海へかけて、日本の小リヴィエラといつてもよく、そこでは潮の色が殊に濃いやうな印象をいつも感じるのは私だけだろうか。

母らしい人に手を引かれて渚を歩いてゐる五つ六つの男の子が、波の来るたびに喜びの声をあげる。海をはじめて見るやうなすなほな驚きがその顔にあらはれてゐる。

海をみて太古の民のおどろきをわれ再びす大空のもと——高村光太郎。

かうした素朴なおどろきを世界の人が忘れてから幾百代になるだらうか。われわれは今日世上に起るいろいろな出来事に驚かされどほしではあるが、それは太古の民が暴風の襲来や、日蝕の暗黒、いな、花の開落や昆蟲のいとなみにさへ感じる素朴な驚きの感情ではない。さうした素直さを失つてから眞の憧れも帰依も影をとどめなくなつたのは当然である。だが、かういふ風に言つてし

まふと光太郎のあの歌に見るふかい含蓄はなくなつて、あらゆる談理がさうであるやうに、素戔とした味気ないことになつてしまふ。——むしろ茫然と海をながめて一時を何もかも忘れてすごした方がよい。海はかぎりなく豊かに神秘的驚きをあたへてくれる。

八月二十七日。

鵠沼の海岸に出たときは、朝からの曇り空がすつかり霧れあがつてゐた。水蒸気はまだ沖にこもつてゐらしく、富士も箱根も見えない。海面には蒼い色の濃淡がまだらに横縞を織り出してゐる。

あのにぎやかなニムフの群は今はどこへ往つたのであらう。俄雨の多い日がすこしつづき、さすがに涼風の立つ夕方が二三日重なると思ふと、もうこのあたりはいきなり静かになつてくる。

冬の海より寂しいのは、きのふの豪華をまだまなましく想ひ出させる、かうした初秋の浜である。それは、ゆうべの多彩な絵巻の痕をのこす大花火の殻の散らばる野原のやうな感じである。

遊歩道路にただ一つぼつりと残つてゐる、サイダーなどを売る屋台店には立寄る人もなく、空瓶に挿した浜な

でし、が風に揺れてゐた。

九月十三日。

キジア台風の影響であらう。朝早くから海の音が高かつた。

聴く海は見る海より暗い威力がある。夜更けてからじつと波の音を聴いてゐると、底力のある響が大地を伝はつて聞えてくる。家を揺がすどんな台風の凄まじい音よりもつと重くもつと暗い響である。それはユビターが天から送る使ひでなく、地下の根の国の領から来るボゼイドンの叫びだから。

この潮鳴りを聞くと、ときどき遠いむかしの冬の夜のことを想ひ出す。二年をすごした北陸の都会に住んでゐたころのことだ。短い秋の季節が過ぎて早くもみぞれがばらばらと檐をたたくやうになると、夜は二里ほどはなれた日本海の汐鳴りが聞える。それは長い暗い北国の冬の先触れである。

その季節からは、灯ともしころになると、この声だけの夜の訪づれを待ち受けてでもゐるやうな気持だつた。夕方のさうした一刻ほど自分が今北国にゐるといふことを身にしみて思はせられることはなかつた。

九月十九日。

今度は關東へ来るといふ台風がそれて、近頃にめづらしい秋晴れの日だつた。夕方海に近い丘へ登る。松林の切れ目に渚が見え、くだける波が白い一とすじの線を描いてゐる。

汀線といふものはおもしろいものである。それは海面と陸地とが交はる線である、といふところから来る。私にはこんな思ひ出がある。子供の私は或るとき、この一條の白線の路を追うて眼をやり、ふと、それに沿うて歩いたらどこへ行くだらう、と考へたことがあつた。道はまづそこから見えてゐた近い浜を通つて行くことはもちろんだが、その先きは、そのまた先きは、と考へて、知つてゐるかぎりの地名を頭に思ひうかべて行くうちに、おどろくべき発見へとみちびかれた。それはどこまでもどこまでも波打際を辿ることをやめなければ、結局今ゐる浜へ歸つてくるといふことだつた。

この発見は子供の心にひどく不思議な、ふかい神秘にぶつかつたやうな感じを起させた。それは、日本は四方海にかこまれてゐる、といふ既知の認識から、新しい未知の認識がたぐり出されてきた自分の推理の路にたいする驚きであつたかも知れない。ともかく子供の頭には、

地球は円いから或る方向へ一直線にどこまでも行けば、最後には元のところに戻つてくるといふ、人に教へられた眞理よりも自分で悟つたことだけに、もつと直接でもつと新鮮な印象をあたへたことだつた。

夕 顔

笹 月 清 美

太祇の句に、

夕顔やそこら暮るるに白き花

というのがある。あたりがようやくほの暗くなつて来た夏の宵、僅かに動き初めた涼風の源でもあるかのやうに清らかに咲く夕顔の風情が、この句によく出ているように思う。その涼味と清純な感じとは、花の白さから来ている。丁度同じ夏の、しかも夕顔に対して朝の景物である白い木槿がそうであるやうに。

木槿の花には淡紫のものや淡紅のものもあるが、それらは別として、純白のものはやや透き徹るやうな白さで、それが朝の涼しい空気の中に咲いている感じは、まことに爽やかである。万葉人が、

朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕陰にこそ咲きまさ